

## 江戸後期における〈美術批評〉研究のための一考察

京都造形芸術大学 神内 有理

〈美術批評〉は、明治期に翻訳語としての〈美術〉と〈批評〉の複合語として誕生し、展覧会などとともに、近代的な〈美術〉評価システムのひとつとして定着する。しかし、当然それ以前にも〈美術批評〉に相当する営為や概念は存在する。本発表では、近代的な概念のもとに発想される〈美術批評〉自体を改めて問う視点として、近世（江戸後期）〈美術批評〉の言説分析を試みる。個別の検討はそれぞれを専門とする人々にとって確認の域を出ないかもしれないが、本発表は近世〈美術批評〉自体を歴史的に捉えようとするものである。

そこで、江戸後期における〈美術批評〉的テキストを文章形態別に以下の四つのカテゴリー：

- ①「画論」形態—主に画家の画論にみられる芸術観や作品評
- ②「故実・考証」形態—学者・思想家らの随筆にみられる考証
- ③「番付」形態—「番付」にみられる品等、ランク付け
- ④「文学」形態—主に書画の賛や画帖・画卷の序文・跋文などにみられる詩文（漢詩・和歌・俳諧）及び学者・思想家らの随筆にみられる評論

に分類した上で、それぞれの言説が果たした機能について考察し、近世における〈美術批評〉の存在、その意味を検討するための足がかりとしたい。

カテゴリー別の検討から、江戸後期〈美術批評〉には、①中国絵画論の体系的かつ論理的な思考を元に絵画の造形的価値を論じる自律的な言語活動もあれば（「画論」形態／「賞鑑」の営為）、②歴史資料として絵画のもつ伝達機能性に価値基準を置いた「考証」形態の諸言説、また③情報紹介の機能を持ちながら、その実用性が揺らぐほどに娯楽として受容される大らかでラディカルな批評形式があったことがわかる。②は、〈絵画〉の価値とは純粋性にこそあると考える近代の絵画観とは異なる〈絵画〉認識に基づくものであったため、近代においては〈絵画〉を語る言葉からは排除された領域といえるだろう。③は、古今・聖俗といったさまざまな区分を無効化させるという、近代〈美術批評〉には構造的に不可能な形式でさえあった。さらに、④のように絵画の内部にありつつ、絵画との相関性の中で批評的意味を発動し、それを詩歌という伝統や典拠を踏まえた言語によって間テキスト的に表明するものもあった（「詩歌」形態）。また、これ以外にも、必ずしも明文化され得ない、形式や営為の中に存在するものもあった（初期の「目利」の営為）。

以上のことから、江戸後期において多様な〈美術批評〉的実践が存在したことが改めて確認される。それらの特徴は、絵画に造形的価値を見出しているとともに、それに付随する交流関係や歴史性などの文脈が重視されていることにある。作品と人、作品と場といった関係の中で作品を多層的に捉え、その価値を判断し批評する態度が江戸後期の〈美術批評〉には存在したといえるだろう。